

第 5 章 企画調査員による調査の概要

第5章 企画調査員による調査の概要

本調査に先立って、2000年4月に実施された「ラ・ルイサ地域開発計画プロジェクト形成調査」の調査結果により提案された「ラ・ルイサ地域農業開発モデル事業(案)」の具体化を目的とし、2000年6月から11月まで、「営農」及び「施設計画」の2分野について企画調査員が派遣され現地を調査した。

営農分野は、吉井和弘氏(国際協力事業団国際協力専門員)が2000年6月から9月まで、施設計画分野は、阿部泰三氏(米国 ABENTAK Corporation 社長)が2000年8月から11月まで、それぞれ派遣された。

両企画調査員の共通の調査目的は次のとおりである。

- ①ラ・ルイサ地区及び周辺地域の土地現況の詳細な調査
- ②ラ・ルイサ地区住民(移住者を含む)及び周辺地区住民をめぐる社会経済に係る全般的な調査
- ③農業開発可能性に係る基礎情報の収集
- ④ラ・ルイサ地区住民(移住者を含む)及び周辺地区住民による土地の活用見通し及び開発ニーズの確認
- ⑤持続的な農業モデル事業に必要な施設整備計画案の策定(プロジェクト形成調査により提示された有畜複合営農「ラ・ルイサ地域農業開発モデル事業(案)」を基に、CESDA(農務省試験場)などへの現地調査を加えて最終的な協力案を策定する。)
- ⑥上記の調査と並行して13年度要望調査で要請可能な農業分野の案件の要請調書を作成
- ⑦先方政府の求める協力内容の確認
- ⑧我が国の協力の可能性の検討及び候補案件の提示

それぞれの企画調査員の個別の活動内容及び成果を取りまとめた現地活動報告書を、次ページ以降に掲載している。

5－1 吉井企画調査員（営農）の報告

- ① 6月分
- ② 7月分
- ③ 8月分
- ④ 6～9月分

平成12年6月30日

企画調査報告書 (平成12年6月分)

ドミニカ共和国企画調査員

吉井和弘

1. 業務の概要

6月20日サント・ドミンゴに到着し、ラ・レイサ地区開発に関する企画調査を開始した。

1) 入植地

ラ・レイサ入植地は次の三つの大きな利点がある：(1)首都サント・ドミンゴに近い、(2)国道沿いにある、(3)送電線がある。これだけの条件の揃った土地を無償譲渡するには、経緯があったとはいえ決断のいることである。

ラ・レイサの土地の市場価格は、RD\$3,000.00 ペソ/タ7 (約\$2,900.00 ドル/ha)である。国内最高の農業生産地コンスタンサ RD\$25,000.00 ペソ/タ7 (約\$24,800.00 ドル/ha)に比較すると、ラ・レイサは農業生産地としての価値は低い。しかし、ラ・レイサは首都に近いことから、不動産価値は数年のうちに急上昇する可能性がある。

事業地は南端のオサマ川沿いの部分が平坦であるのを除いて、全体に起伏がある。灌漑設備の導入は、地形上からも困難である。土壌浸食がみられないのは、長年砂糖キビ栽培で土壌が固くなっていることと砂糖キビで覆われていたためであろう。La Luisa Prieta の住民が植えたのであろうパッションフルーツが1/4ha 程入植地の中にある。よく実がなっている。適地適作で生産をあげることが出来よう。

2) 入植地のコミュニティ

入植地に入り込んだ形で、La Luisa Prieta と La Luisa Blanca の二つのコミュニティがある。Monte Plata 県にあり、開発から取り残されている。サント・ドミンゴから来てラ・レイサに到着する手前、つまりオサマ川を渡る手前に Guanuma という大きな部落がある。Guanuma は Distrito Nacional 県に属し Monte Plata 県に比べるとインフラが整備されている。

La Luisa Prieta の一部で、入植地との境界に el Batey という小部落がある。El Batey は、砂糖キビ農園の周辺にある、砂糖キビ畑の労働者としてもともと出稼ぎに来て住みついたハイ

チ人の小部落で、貧困が目立つ。

La Luisa Prieta と La Luisa Blanca の住民は、Monte Plata 市傘下の隣人委員会 (Junta de Vecinos) により組織されている。いろいろの非政府団体 (NGO) が入ってコミュニティの生活向上に努めている。例えば、ドイツの NGO は La Luisa Prieta に 10 数本の井戸を掘りハンド・ポンプを設置した。

NGO は井戸掘職人を雇い、手押しポンプを提供した。NGO は、井戸毎に住民をまとめ、住民はセメントを買い、職人に食事を提供し、交替で井戸掘作業を行った。ハンド・ポンプは簡単なもので住民が修理できるものを選んだ。家族毎に月 RD \$5.00 ペソを修理費として積み立てている。浅井戸なので汲み上げ量を一家族について一日バケツ 4 杯に制限している。こういう状況のなかで、給水設備を整備する場合、住民参加は不可欠である。

電力公社は、最近電力供給部門を民営化した。配電と料金徴収の効率をよくするためである。La Luisa Blanca では配電されていても電気代を支払わない家が多く、電力公社は電気代を支払わない家の配電線を切断している。こういう状況では、La Luisa Prieta の電化を推進することは出来ない。

3) 入植者

ドミニカ共和国の日系移住者は計 226 家族 863 名である。そのうち農業自営者は 53 名 (24%) で、農家の高齢化と後継者不足が問題である。その他、農業外自営者が 55 名 (24%)、給与所得者 40 名 (18%) となっている。日系移住者の丁度半分が、サント・ドミンゴ地区に在住している。

ラ・ルイサ地区に入植を決定した 26 家族のうち、丁度半分の 13 家族がサント・ドミンゴ市に在住している。農業を営んでいるのは 7 家族 (27%) で、サント・ドミンゴ市在住のものではなく、ラ・ルイサ地区に最も近い人で 80km 離れた所に住んでいる。

入植決定者は生活の基盤を既にもっており、ラ・ルイサ地区に移り住んで入植する人はいないと考えられる。まず最初、農業を営んでいる移住者が第 2 の生産地としてラ・ルイサに入植し、その後農業を営んでいない移住者が、土地を貸したりあるいは自分で入植すると思えら

れる。入植といっても移り住むのではなく、通勤入植すると考えられる。耕作面積が比較的小さいことから、また初期投資を軽減するために、農業機械の共同購入、共同利用が望ましい。

4) 営農計画

入植決定者に営農計画について聞いて見た。まづ、プロ形調査団報告書の営農計画について意見を求めた。

(1) 共同放畜

アイデア：日系人高齢化対策的共同計画、不在地主型。廃園同然の砂糖キビ畑（750ha）を全て牧草地に変えて牧柵を張りめぐらし、牧夫2—3人を常に雇い、約1,000頭の牛の放牧をコントロールし、年間300頭くらいの自然増加率で老齢年金的収益をコンスタントにあげる営農方式。

意見：日系移住者はまとまりにくく、現在でも3つのグループに分かれている。せいぜい親戚なら共同経営できるが、入植者すべてで共同経営するというのは難しい。また、750haでは面積が小さくて普通の牛では採算があわない。純系列牛とか、特性を生かさないと経営が成り立たない。

(2) 有畜複合営農：地主滞在型

アイデア：果樹、野菜、家畜飼育（牛、豚、鶏、山羊）、飼料作物／牧草、緑肥、自給作物の複合経営でそれぞれの副産物が家畜飼料や有機質肥料となって、相互補完的サイクルが成立し、収入源も果樹、野菜、家畜など、通年多角化し、忙しいが安定した持続的営農が可能となる。

意見：あまり手間のかかる農業はできない。時々出かけてでもできる営農形態が望ましい。

(3) 熱帯植林公園

アイデア：住民参加型の持続的農村・農業開発、環境保全の教育・啓発の三重目的を追究しつつ、観光客を呼び入れる熱帯植林公園を経営する新しいタイプの営農方式。

意見：観光客はドミニカ共和国のビーチと太陽を求めてやってくる。熱帯植林公園で収入が確保出来るかどうか疑問である。

5) 開発調査の要請書作成

農地庁（Instituto Agrario Dominicano-IAD）企画課 Alfonso Vizcaino と国際協力課 Héctor Keppis の両職員を指導して、開発調査の要請書を作成した。要請書の要点は次の通り。

(1) 題名：コミュニティ参加によるラ・ルイサ地区開発プロジェクト

副題：砂糖キビ荒廃地における農牧生産再活性化のための基盤整備と機械

(2)序文

- ・近年ドミニカ共和国の砂糖生産は生産性が低くなり、伝統的な輸出国が輸入国となった。
- ・砂糖生産が減少した結果、砂糖キビ畑が放棄され周辺の労働者が失業した。
- ・従って、放棄された砂糖キビ畑での農牧生産再活性化が必要である。

(3)目的

- ・コミュニティ参加により La Luisa Prieta と La Luisa Blanca のインフラを整備する。
- ・元砂糖キビ畑で地域の雇用増加の為にモデル入植事業を行う。
- ・地域に最も適応し収益性の高い作物を決定し営農計画をたてる。

(4)経緯

- ・ラ・レイサ地区の砂糖キビ畑の荒廃は80年代の終りに始まった。
- ・砂糖公社(Consejo Estatal de Azúcar-CEA)は、ラ・レイサ地区の元砂糖キビ畑を入植事業を行う為に農地庁 (IAD) に譲渡した。
- ・ラ・レイサ地区には La Luisa Prieta と La Luisa Blanca の二つのコミュニティがあつて、約400家族 3,000人が住んでいる。

(5)調査対象地区

- ・ La Luisa Prieta と La Luisa Blanca のみを対象として Guanuma は対象としない。

(6)開発のストラテジイ

- ・コミュニティの参加によりコミュニティの給水施設を整備する。
- ・コミュニティの排水設備、主幹道路、アクセス道路を整備する。
- ・コミュニティの配電線設置は対象外とする。
- ・モデル入植事業では、排水設備、主幹道路、アクセス道路、ロットの柵、倉庫の建設を行う。
- ・モデル入植事業では、入植者は農業機械を共同利用する。
- ・倉庫には、農業機械、機械整備場、農業資材、農産物、事務所を設置する。
- ・モデル入植事業では、灌漑設備の建設は行わない。

2. 主な行事や出張など

19(月)・成田発 12:00 (JL006) ニューヨーク着 11:20

20(火)・ニューヨーク発 12:35(AA635) サント・ドミンゴ着 16:38

大使館およびJICA 事務所との打ち合わせ

21(水)・(1)農地庁表敬訪問、(2)大使館、JICA 事務所と入植者代表との打ち合わせ

- 23(金)・(1)大使館表敬訪問、(2)大統領府技術庁表敬訪問、(3)ラ・レイサ地区視察
29(木)・新美領事移住政策課長とラ・レイサ入植者との懇談会

3. 関連事項

農地庁では、ラ・レイサ入植地の現状を「時限爆弾」と呼んでいる。ラ・レイサには日系人が入植することが決まっているので、周辺の住民は土地侵入もせずにじっと待っている。入植地では何も動きがみられないので、土地侵入がいつおきるかもしれない「時限爆弾」だという。一旦土地が侵入されると、農地庁でも何もできずに侵入者のものになるという。土地侵入は全国的な規模で戦略的に行われている。農地庁は、日本側が一日も早く具体的に何かを実施することを願っている。

4. 今後の計画、その他

- 1) 「ラ・レイサ地区開発に係る連絡協議会」開催
- 2) 開発調査要請書のフォロー
- 3) 農地庁個別派遣専門家要請書の作成指導

以上